

第5部会

1. セッションⅠで討議された内容 / 2. セッションⅡで討議された内容

5回の委員会と、本日午前三つの分科会を設けての協議、それに続く午後の第2セッション合同協議を取りまとめて、私たち「ことばとコミュニケーションの教育」部会は、メンバーがどんなことを、この聖学院の教育について考え、語り合ってきたかを、報告する。

まず、大きな輪郭としては、数あるコミュニケーションの中で、最も重要なもの、すなわちことばを中心とする、ことばによるコミュニケーションに絞って、いかなる教育が必要であるか、という問いだけに取りくんだ。

幼稚園から大学まで、それぞれの機関で働いておられる先生方の、御報告や御発言が、今、私の頭の中に、そして心の中に渦巻いている。国語科を中心として、社会科、美術、体育、保健、さまざまな勉学の場で、聖学院という学校のどの機関においても、大変な努力が重ねられていることを、知ることが出来た。

個々の科目、その中の方法、担当者、研究、導入する人、受けとめて広げる人、役割りもさまざまだが、一つだけ例をあげるならば、今日の分科会の一つを形成していた「ディベート教育」である。

ディベートという方法を学ぶことは、単に論理の構築を学ぶという括った言い方では足りないものがある。準備の段階において資料を読む、先行の論を把握する。要点を抜き書きする、そして議論に役立てる。そういう作業過程において実に多くの知的成長に必要な刺激が与えられる。更には、相手の論旨に耳を傾けるという点において、ある意味では相手との共同作業を行なう力を伸ばすことにもなる。民主主義の基本ルールを学ぶと言ってもよい、この方法を、小学校から高校まで聖学院が力を入れていることは、すでに皆さんもよく御存知のことである。題材の選択の難しさ、指導側の準備の苦勞、更には、ディベートという方法で解決できる問題の限界など、向き合う問題は多々ありますが、実に信頼できる教育の効果あげつつあるのが、聖学院のディベート教育である。一層教育的意味を問いつづけながら進めて行ってほしいと思っている。

さて「ディベート」のほか、「ことば」と「コミュニケーション」の三つに分かれた今日の協議、大変明確に私たちに示してくれたことがある。それは、ことばの教育を論じれば、心の問題、人格の問題がその背後に重くあることである。たとえば、幼稚園からも、大学からも、子どもたち若者たちの語彙のとぼしさが問われた。中学校からはこういう発言があった。生徒たちは、ムカツクとかウザッタイとかの型にはまったとぼしいことばでしか自分を表現しない。そして、そのような自分に何も感じない年齢の子たちがいる。そこに何となく不安を感じるが自分から殻を破って別なことばの世界に行こうという行動には出ない子たちもいる、と。そして大学には、その殻を厚くして立てこもる若者がいる。何段階もの成長の、それぞれの辛さのただ中にある姿が、学校にはある。それが見えた。そして、年齢差を越えて共通しているのは、他者への無関心、あるいは他者を忌避する心のあり方である。ことばが出会った心の問題は、そのままコミュニケーション部会の主なテーマにつながるものだった。

ことばを欲しない、殻に立てこもる子どもや若者が、殻を破りたいという心の動きが持てるのは、相手を信頼するときだけである。その信頼はどうやって得るか。時に人間関係をうち砕く凶器となる「ことば」だが、その「ことば」こそ信頼構築のための不可

欠の存在である。コミュニケーション部会の今日のレジюмеから、次の文を引用する。

「ことば」は心に残り、未来に伝達される。

人間存在の基礎となる。

3. 今後の課題、継続討議について

来年度は教育方法の具体化を図るのが、「ことばとコミュニケーションの教育」である。

以 上

(報告者：須山 名保子)